カナダ特派員日記④

カナダ人とつき会う法

橋田忠明

海外で現地の人達と親交を結ぶにはどうすればいいか――。日本人にとって明治の文明開花以来、常に念頭から離れない永遠（？）の課題なのかも知れない。米国で長く生活してカナダに転勤してきたある日本人駐在員がこんな感想をもらす。「米国人は陽気で開放的なので飛び込みやすく、すぐに隣り近所と親しくなる。が、カナダ人は何かしら心の壁を感じてうちとけにくい」と――。

確かに、カナダに生活していて、この駐在員の感想に思い当るフシもないではない。仕事でつき合う要人達も表向きは親切だが、すぐには胸襟を開かない人が多い。陽気にジョークを連発してこちらをなごます米国人トップ達とは確かに違う。

トロントに十年以上住む大手銀行に勤める日本人の部長氏は、「着任後一年位たって、ある重役と食事をすると、それまで話をしたことがなかったのに、実に私の日常の言動を知っているのに驚いた」と語る。彼らは話しかけると悪いと思い、気を使ってそっと観察していたのだという。こんな心やりは何かしら外人を迎えた日本人の応接にも似ている。傍若無人に振舞うのでなく、いつも相手の心情を思う。親切で、つつましく、しかも表面で見る以上に思索的ではある。英国の気質を残したカナダ人の特性だろう。つき会いが深まるとともに、日本人に似た心のヒダを感じる人も多い。

ビジネスには米国のやり方が普及し、意見をしっかりと主張しないと理解し合えない面はある。だが、米国人に比べてとっつきにくい印象の彼らが、一度親交を結ぶと日本人とのそれ以上に深い交際に発展する。そして、カナダ人家族が、東京や大阪の都会生活に慣れた我々から見ると、甘いとも思えるほど純粋な心を持っているのを発見するだろう。

要は、どんな要職、政府の高官でも企業のトップでも、はたまた有名な大学教授や芸術家に対しても、まず、先入観を全く持たないことだ。第二に相手の言葉を素直に受け取り、日本人にありがちな詮索をしないこと。第三は言葉にハンデはなく、むしろ、自らを磨くこと、である。

外交交渉を取材していて、日本からの政府要人達が相手の性格分析をして、その言葉の裏を詮索する場面をよく見かける。だが、えてして、交渉を終り、帰る頃になると、「あまり予断を持たない方がよかった」と述懐する人達が少なくないようだ。深読みは大事だが、カナダ人とつき合う場合、その読みだけに頼ると余りいい結果を生まない。むしろ、淡々と率直につき会ったほうが道は開ける。

海外では言葉はどうしても大切である。だが、カナダに限り、「言葉にハンデなし」と言い切ってもいい。むしろ、それにコンプレックスを持って躊躇するほうが問題だ。私事で恐縮だが、カナダに赴任した直後、英語があまり話せない私の言葉は英語と日本語のチャンポン。いわば〝バイリンガル〟で近所のカナダ人主婦達とつき会った。妻のほうも気遅れがあったのだが、そのうちにしっかりした人ほど日本語でもその時のニュアンスで必死に理解しようとしてくれるのに気付いた。そして、妻が会話にはさむ日本語を楽しんでいる風情なのだ。妻の親友のある主婦に、「ミスター・ハシダは日本人なのに英語ばかりしゃべる。日本語を忘れたのではないか」と冗談まじりに問いかけられ、かえって面くらったことがある。

取材を通じてカナダで多くのあらゆる分野の人達とつき会っているが、不思議な共通項がある。口早にイディオムを交えながら話しかけてくるタイプ――これはきまって周囲のカナダ人からも余り信用されていない人が多いのだ。言葉で煙に巻こうとするタイプの人達、企業社会を例にとると〝出世タイプ〟ではない。私はこのことをある大手銀行の会長にただしたことがある。「私も日本語を話せない。それなのに英語で話してくれる外国人になぜ言葉を誇る必要があるのか。互いに理解し会うことがいちばん大事だし、そんなことよりその人の品性やまじめさ、深い知識ですヨ」と簡単に言ってのけた。

カナダは多くの人種から成る〝モザイク社会〟であり、有能で各界のトップ級に進んだ人でも〝なまり〟のある英語を話す人をよく見かける。フランス系のケベック州に行くと、要人達の多くの英語は我々が中学、高校で習ったそれである。

カナダ人と深くつき会うと、ルーツ意識と家庭第一主義なのを痛感する。「先祖が英国のどの町の出身で、カナダではどの大学や高校を出たか」、日本で普通のこうした素朴な話が結構つき会いを深める糸口になる。家族の話、バケーションの話、文化の話、それらがカナダ人の〝好きな話〟である。日本の歴史や文化の話をしてやると、途端に目を輝かすカナダ人は多い。毛色の変わった話題に飢えているようだ。

あるカナダ人の親友がこう言う。「君は日本人であることがそのままカナダでの〝個性〟だし、うらやましい気がする」と。日本人としての品性と真摯さを持ち、絶えず知識の習得や精神の修養を怠っていないこと――。言わば、きわめて当り前のことだが、カナダ人に親交を深めるための私なりの結論である。そこには何の交際術もいらない。カナダ人でしっかりした人物ほど、こんどは日本人の目から見ると、その要素を備えているわけだ。

（日本経済新聞トロント支局長）